

# はりもとともかず 張本智和選手に

## 記念の楯を贈呈

1月15日から21日までの間、東京都で開催された全日本卓球選手権大会において、大会史上最年少の14歳で男子シングルス優勝を果たした仙台市出身の張本智和選手に、2月3日、優勝を祝して記念の楯を贈呈しました。

張本選手は大会で4種目に出場し、ジュニア男子シングルスと男子シングルスの二冠を達成。「相手に向かっていく気持ちでプレーできたことが、良かったと思います」



▲張本選手（中央）、張本宇コーチ（右）



▶市役所本庁舎に設置された、優勝をたたえる看板前で撮影に応じる張本選手

市政トピックス

### 仙台市スポーツ賞表彰式

2月2日、「仙台市スポーツ賞」の表彰式が行われました。これは、昨年1年間にアマチュアスポーツの分野で優秀な成績を収めた方や本市のスポーツ振興に貢献された方に贈られるものです。

栄光賞は29組が受賞。受賞者を代表して、個人の部から、ユニバーシアード競技大会でゴルフ・男子団体のメンバーとして優勝、個人としても2位の成績を収めた比嘉一貴選手（東北福祉大学4年）が「地元の沖繩から仙台に来て、充実した4年間を過ごすことができました」とあいさつ。団体の部からは、女子全国高等学校駅伝競走大会で優勝した仙台育英学園高等学校女子陸上競技部の武田千捺選手



▲武田千捺選手

▲比嘉一貴選手

市政トピックス

### 事業ごみ減量に向けて 事業ごみの展開検査装置を導入

「す」と語りました。郡市長は「張本選手の強さには、驚きと感動を覚えました」と活躍をたたえ、「東京オリンピックでのメダル獲得を期待して、市民みんなで応援していきます」と激励しました。

東日本大震災以降、高止まりの傾向にある事業ごみの減量に向けて、今泉・葛岡・松森の3カ所の清掃工場に、事業ごみの展開検査装置を導入しました。この装置は、搬入されたごみの中に産業廃棄物やリサイクル可能な紙類などの資源物が混入していないかを検査するためのもの。収集車から装置のベルトコンベヤーに直接ごみを降ろし、産業廃棄物などが混入していないか検査員が確認します。従来は、工場内の床にごみを広げて検査していたため多くの人手が必要で、3工場年間6日程度の実施にとどまっていたが、装置の導入により、検査の大幅な

市政トピックス

### 金メダルおめでとう！ 羽生結弦選手

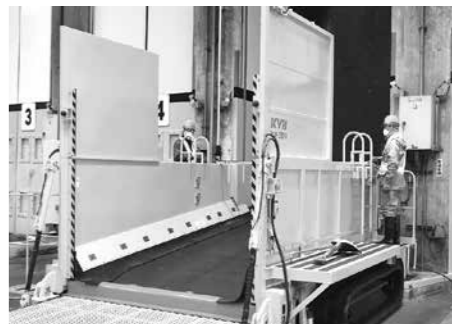
選手が「たくさんの方の応援のおかげで全国優勝を果たしました」とあいさつしました。

このほか、優秀賞、奨励賞を計34組に贈呈しました。



▲演技でのジャンプが決まると、パブリックビューイングの会場は大歓声に包まれました

2月に韓国・平昌で行われた冬季五輪で、フィギュアスケート男子シングルに出場した仙台市出身の羽生結弦選手が金メダルを獲得し、前回ソチ五輪に続く2連覇を果たしました。2月17日にカメイアリーナ仙台で行われたパブリックビューイングには、市民や羽生選手のファンなど約1600人が応援に駆け付け、声援を送りました。けがを乗り越えての偉業達成に、会場には歓喜と祝福の拍手が鳴り響きました。



▲事業ごみの展開検査装置

時間短縮と年間を通しての検査が可能となりました。市では、検査回数を増やし、混入状況を調査した結果を基に、的確な事業ごみの排出の指導・啓発を行い、ごみの減量につなげていきます。

市政トピックス

### ワケのある芸術祭 「せんだい資源ナール」開催

資源循環とリサイクルの必要性をアートの力で訴えるイベント「ワケのある芸術祭―せんだい資源ナール」を、1月26日から28日までの3日間、せんだいメディアテークで開催しました。期間中、アーティストが資源再生をテーマに制作した作品や、市民プロジェクト「ワケあり雑がみ部」が市民から提供された包装紙、紙袋などの「雑がみ」を使って制



▲子どもから大人まで参加し、自由な発想で雑がみをアートに仕立てたワケあり雑がみ部の作品。菓子箱を使った動物、ロボットなどが並びました

作したアート作品などを展示。捨てられる食材をおいしい料理に変身させる映画「0円キッチン」の上映や、資源にまつわるトークイベントなども実施しました。捨てればごみとして処理されてしまうものも、きちんと分けて使用すれば価値のある資源となります。市では、今後もごみ分別の徹底と資源の再利用を呼びかけていきます。

## 3.11 震災文庫を 読む

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊からよりすぐりの本を「紹介します」。

読む／書く／編むの「初心」へ

出版社「荒蝦夷」代表 土方 正志

「震災編集者 東北のちいさな出版社〈荒蝦夷〉の5年間」



熊谷達也／著 集英社刊



土方正志／著 河出書房新社刊

「希望の海 仙河海叙景」

仙台市在住の直木賞作家・熊谷達也さんが、東日本大震災後に描き続ける仙河海シリーズの一冊が「希望の海」です。熊谷さんは作家デビュー前の1990年代を気仙沼市で中学教師としてすごされています。気仙沼そのものといつていい架空の港町「仙河海」の、明治から近未来までの歴史を綴る三陸の海と町と人の叙事詩は、現在までに8作が刊行されています。

「希望の海」はシリーズ中で唯一の短編集。「あの日」をほさんだ仙河海の人たちの群像劇のように読めます。収録作「ラツオクの灯」は、昨年「いまのまき演劇祭」で演劇ユニット

ト「コマイぬ」の手によって劇化上演されました。

拙著「震災編集者」は、「あの日」の直後から東京の同業者たちに勧められて書き続けたさまざまな文章をまとめた本です。自ら体験した日々を綴るのにためらいはありましたが、未来の被災地の同業者へのささやかな伝言になればと、被災地で作る意味を考えようと、そのための日記と想って原稿依頼は全て引き受けました。いまも時折、あの日からの初心を忘れてはいけなさと自ら頁を繰っています。台湾の出版社から刊行予定の中国語版も、震災文庫に加えていただきたいと思います。

※紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・15805